文化大革命の記憶——回顧録と同人誌を資料として

高口康太

今回、寄稿にあたって「文化大革命に関する記憶」というお題をいただいた。普段は現代中国の経済、企業、社会問題を中心に取材を行っている筆者にとっては一つの挑戦であったが、与えられたチャンスを生かして、長年の課題に取り組むことにした。

その課題とは何か。日本メディアにせよ、中国共産党に批判的な中国民主化人士にせよ、中華人民共和国がもたらした最大の災厄として大躍進と文化大革命を挙げることが多いにもかかわらず、実際に当時を生きていた人々に会って話を聞いても、不満や憎しみなど強い感情を見せる人が意外にも少ないという問題だ。もちろん、文化大革命において「批闘」などの被害を直接受けた方ならばいまだに忘れることのない強い感情を持っているのは当然だ。ただ大躍進について話を聞くと、誰もが一様に当時の苦しさや混乱を口にするのに比べると、文化大革命に対する怒りは個々人の温度差が大きい。

この問題に対してどのように接近し消化するべきか悩み続けてきたが、今回いただいたチャンスを機に考えてみることにしよう。資料とするのは元知識青年の回顧録、同人誌である。老齢に達した彼らが今、どのようにあの時代を振り返っているのか。その記述を通じて考えてみたい。

まず知識青年について簡単に説明しておこう。それは一九五〇年代から一九七七年にかけて、都市から農村に送られた、一定以上の教育を受けた青少年を意味する。特に文化大革命が始まった後、「上山下郷運動」として、多くの若者が農村に送られた。正確な統計はないが、この間に下放された数は一二〇〇万人から一八〇〇万人に達したと推計されている。

上山下郷運動がどのような悲惨な事態を招いたのかについては、日本でも繰り返し取り上げられてきた。批闘大会（公衆の面前で展開された反革命分子に対する吊し上げ）、文化財の破壊と並び、文化大革命がもたらした被害を代表する問題として認識されているのではないか。

しかし、この日本の「常識」をもって、知識青年たちの回顧録に

接すると面食らうことになる。そこで描かれているのは悲惨な生活や暴力以上に、奮闘努力した青春時代という要素が強いからだ。

プロパガンダと回顧録

まず、現在の中国でもっとも有名な知識青年である習近平総書記の下放時代がどのように描かれているのかを見てみよう。共産党員網の特集サイト『習近平的七年知青歳月』（習近平、七年間の知識青年時代）というサイトでは、習近平総書記が一九六九年から一九七五年にかけて陝西省延安市延川県文安駅公社梁家河村挿隊に居住していた時期について、当時を知る人々のインタビューを中心に振り返っている。なお、このサイトの内容は中国共産党中央党校出版社から二〇一七年八月に書籍としても出版されている。

『習近平的七年知青歳月』ではきわめて事細かに当時の生活を描写している。プロパガンダの一環である以上、習が苦しみに耐えて労働にいそしみ、勉学を忘れず、村民たちに学問を教え、また人々の苦難を救うために尽力したという模範的人物であったという描写が多いのは当然だが、それ以上の比率で生活の細部が描写されている。一節を引用してみよう。（以下の和訳は筆者による）

インタビューグループ：毎日、何を食べていたのか？

張衛龍（現地村民）：毎朝団子を作った。トウモロコシ粉とぬかで作った。午後は麺だ。マメやコーリャンの麺がほとんどで、小麦は七、八日に一回だった。当時はこういうものは足りなかったからね。

インタビューグループ：おかずはあったのか。

張：酸菜（漬け物）だ。近平が戻ってきた時、「長いこと梁家河村の酸菜を食べていない、食べたいよ」と言っていた。

インタビューグループ：酸菜は何で作っていたのか。

張：白菜と大根だよ。

インタビューグループ：一一年中、酸菜を食べられたのか？

張：九月から翌年三月、四月ぐらいまでの半年は酸菜を食べていた。それ以外の時期は新鮮な野菜を食べていたよ。キュウリやトマト、ナス、トウガラシとかね。

サイトは基本的に現地村民のインタビューで構成されているが、前述のように当時の生活を再現できるような、きわめてニッチな生活に関する情報がちりばめられている。貧困に負けず現地村民のために尽力した習近平の偉大さを強調することが目的のプロパガンダであるはずだが、印象に残るのはどんな野菜を使って漬け物を作っ

ていたのかなど、日常生活に関する細かいエピソードだ。

苦しい生活を耐え抜いた習近平の偉大さを受け取るプロパガンダとして受け取るべきだろうか。確かに記述には習近平の業績を強調する個所も多い。

インタビューグループ：習近平は村党支部書記に就任後、何に取り組んだのか。具体的に教えてほしい。

石陽春（現地村民）：最大の業績はバイオガスだ。四川省綿陽市の視察を通じて、バイオガスタンク建設の技術を学んできた。延川県の気候に合うよう研究し、施工した。知識青年が住む家のかたわらに穴を掘り、セメントで固めて池のようにした。一部の挫折はあったが、バイオガスタンクはついに完成し、燃料不足の解決に大いに貢献している。

梁家河村は陝西省で初めてバイオガスランプの明かりを得た。炊事にも照明にもバイオガスが使われた。そればかりか、（タンク内の発酵物は）肥料として使うこともできた。まさに一挙両得だ。

また近平は村に「鉄業社」（鍛冶屋）を作った。発端は、ある村民が鉄を加工できると知ったことだった。そこで小工房を作らせ、その村民に農具を作らせたのだ。鉄業社で働けば「工分」（労働点数）を稼ぐことができる。農具が必要になっても県城まで行く必要がなくなり、大変便利になった。

他に代理販売所の開設にも取り組んだ。それまでは七〇里（約三五キロ）あまりも離れた文安駅公社まで買い出しに行かなければならなかった。狭い道もあり、買い出しは一日がかりの大仕事だ。油一つ買うのにも朝早く出発して、帰れば日が暮れようとしているというありさまだった。

（……）近平は有言実行の人物だ。村民を率い、瞬く間に代理販売所を開設した。そこには油、石けん、塩、アメ玉など生活必需品がすべてそろっていた。

梁家河村時代の最大の功績としてあげられているのがバイオガスタンクの導入だ。バイオガスとはタンクに糞尿や残飯を集め、発酵させることでメタンガスを得る技術である。自然環境が厳しく、薪集めもままならない同村で燃料を得るために、バイオガスタンクは大きな役割を果たしたという。

また鉄業社と代理販売所はまるで改革開放を先取りしたかのような発想で、村の生活を便利にしたと強調されている。興味深いのは

文化大革命の只中に市場経済的な改革を行えば反革命分子として批判を受ける可能性があったが、習近平は当時の政策に違反していなかったと釈明されている点だ。鉄業社も代理販売所も基本的には利潤を得ないように運営されており、仕事に従事した村民たちは労働点数をもらって分配を得ていたことが記述されている。

さて、『習近平的七年知青歳月』をどこまで事実としてとらえられるのかは難しい課題だ。プロパガンダ目的で作られた文章であることは間違いなく、事実と脚色の線引きはきわめて困難だ。慎重な史料批判が求められる。残念ながら今、筆者にはその用意がないのだが、一つきわめて興味深い事実を指摘しておきたい。それは同サイトの記述が他の元知識青年による文章ときわめてよく似通っている点である。

知青網の回顧録

中国には「知青網」（知識青年サイト）と呼ばれるサイトが多数存在する。「中国知青網」「共和国知青網」という全国レベルを対象としたサイトから「北京知青網」「上海知青網」「ワシントン中国知青協会」など現在の居住地ごとのサイト、さらには「黒龍江兵団網」など滞在先のつながりによるサイトなどその数はきわめて多い。

そうしたサイトのひとつ、「中国知青網」に「上山下郷運動で独学した労働と生活の技能」という記事がある。高校卒業後、一九六八年に吉林省哲里木盟通遼県双泡子公社双泡子大隊に下放された人物が書いたコラムだ。下放後に自学自習して大学教授になったという半生を振り返る内容だが、農作業の間に勉学に励んだというだけではなく、農村での生活でさまざまな体験をしたことが事細かに語られている。例えば『習近平的七年知青歳月』にも登場した酸菜に関する記述だ。

隣家が生活の糧としていた技術が酸菜だ。現地の人々は「漬」の字を「jì」と発音する。白菜を漬けて酸菜とするのだが、その手法は簡単だ。白菜を縛って容器に入れる。一般的には大きなかめが使われる。なるべく隙間のないように配置する。もしきっちり詰められなければ、白菜を小さく切って隙間に詰める。その後熱湯をいっぱいに注ぎ、塩を加える。塩は入れなくてもよい。白菜が浮かないように石で重しをして、泥でかめの蓋を密封する。摂氏一〇～二〇度の気温で二〇日以上放置する。気温が高ければ高いほど発酵時間は短くなる。これは酸菜を腐敗させないための重要な工程だ。

『習近平的七年知青歳月』と同様に、異郷の地の文化についての詳細な記録が残されている。中国知青網にはバイオガスに関する記述もある。文化大革命からさかのぼること十余年の一九五七年に天津市郊外の農村に知識青年として送られた秦靄雲のインタビューだ。

静海県からは秦ともう一人の同志が東北地方に農業技術の学習に出向いた。戻ると発電ダムを建設したが、秦はダムに加えてバイオガスの手法も学んでいた。当時、ほとんどの農村には電気がなかった。バイオガスの副産物としてできる発酵肥料は地力を増す効果がある。そしてバイオガスでは発電もでき、環境も浄化できるのだ。一石数鳥である。秦は容器を探してきて糞便を密封した。一カ月後、バイオガスが生じ、電灯に明かりが灯った。県当局は秦を招き、この技術を積極的に広めさせた。

この二つの文章に限らず、知青網に掲載された回顧録やインタビューは、『習近平的七年知青歳月』と共通する部分が少なくない。故郷とは異なる下放先の文化に懐かしさを感じていること。知識青年たちにより農村に新たな技術や制度がもたらされたこと。厳しい環境にも負けず奮闘努力したことなどがあげられる。

無数にある知青網はほとんどが中国本土のサーバで公開されているため、中国のインターネット検閲の管轄下にある。体制批判的な内容は削除され、結果として習近平のエピソードと似通っている可能性も否めない。

知識青年の同人誌

『納勝河両岸的故事』

そこで比較対象として『納勝河両岸的故事』という本を取り上げたい。同書は二〇一五年の出版、新疆生産建設兵団のタリム第一農場、第二農場（現在は新疆生産建設兵団第二師三十四団、三十五団）に上海市から下放された元知識青年が寄稿している。関係者のみに配布されたもので、日本でいうところの同人誌に相当する。奥付によれば三千部印刷されたというが、ほとんどは関係者に配布されたもので一般的に流通していない。中国の古書店サイトでも情報が載っていない、貴重な同人誌だ。

無許可での出版は中国では違法行為にあたる。ましてや文化大革命期の回顧録という内容である。関係者も扱いに配慮しているようだ。筆者は同書を入手するにあたって当初郵送してもらうように頼んだが、リスクがあるとして断られたため、手渡しで受け取ることとなった。

編集後記には「ある者は心に刻まれたが訴えることのできなかっ

た真実の物語を文字の形で残した。当時は書くことができなかったものだが……」とある。この文言を見て、禁書として大胆な内容が書かれているのではないか、検閲を受けた知青網とは異なる内容があるのではと期待を持った。だが実際に読んでみると、ネットに公開されている知青網と大きな違いはない。郷愁、下放先の生活、新たな技術の導入、奮闘努力という内容が並ぶ。

場所が新疆ウイグル自治区だけに酸菜に関する記述を見つけることはできなかったが、バイオガス発電については回顧録が寄せられている。一九六四年に下放され、学校教師を務めたという瞿徳昌の寄稿「あるバイオガスプール」だ。

四川省から派遣されてきた専門家の指示に従ってバイオガスプールを建設したが、糞便を寝かせても一向にガスが発生しない。専門家は原料に問題があるといって、プール内の糞便を数回取り替えさせたが、それでもガスは発生しない。「ここの環境には合わないのだろう」とぶつぶつ言いながら専門家は匙を投げて帰ってしまった。

なぜ発酵しないのか、瞿はその後も悩み続けたが、ある時にひらめいた。プールの外壁を作る時、農薬散布に使ったことがあるスプレーを使ったが、残っていた農薬が原因で発酵が進まないのではないか。その考えを上司に進言した結果、プールをよく洗って再度試してみることとなった。

毎日圧力計を見つめていたが、四日目になって動きがあった。四日目から日々、バイオガスプールの圧力が上がっていくではないか。バルブを開けてみると、異臭が立ちのぼる。慌ててマッチを近づけると、ボンという音とともにボイラーに火が灯った。成功だ。気持ちを抑えきれず、雄叫びをあげた。

「成功した！　ついに成功した！」

声を聞きつけた同僚たちが一斉に集まってきた。ボイラーの炎を見て大喜びしている。翌日以後、オフィスには近隣の人々が見学に押し寄せてきた。みな口々にこのニュースを伝え、バイオガス成功の知らせは瞬く間に広がった。

習近平を讃えるサイトと、この知識青年の回顧録は共通点が多い。それは、たんにバイオガスや食事などの話題が共通しているというだけではなく、文革や下放に対して直接的な怒りをぶつけるというよりも、苦しくも勤勉に活きた過去として振り返られている点だ。日本で一般的にイメージされているような、極端な暴力や破壊、人間性の否定などといった文

化大革命像はそこにはない。

回顧録以外では映画、ドラマでの描写も同様だ。チャン・イーモウ監督の映画『活きる』（一九九四年公開、原作は余華の小説）、二〇〇一年公開のドラマ『激情燃焼的歳月』、二〇〇四年公開の映画『ジャスミンの花開く』、二〇〇七年公開のドラマ『大工匠』など、中国には中華人民共和国建国から現代にいたるまで激動の時代を経験した個人史、家族史を題材とした映像作品が多い。文化大革命は必ず重要なトピックとなる。文化大革命は貧しく苦しい時代ではあったものの、極端な暴力の描写は少ない。むしろ懸命に生きた懐かしい時代というイメージが強いのではないか。

傷痕文学との違い

日本における文化大革命イメージに近いのは一九七〇年代末、文化大革命終結直後に登場した傷痕文学だ。文化大革命が社会の物質的側面のみならず、人々の精神にいかに深い傷跡を残したのかを描いた一連の文学作品である。

その嚆矢とされているのが一九七七年一一月に雑誌『人民文学』に発表された劉心武「班主任」（担任教師）だ。犯罪者として拘置所に入れられていた中学校三年生の少年・宋宝琦が釈放された。ベテラン教師・張俊石のクラスに転入したことから始まる問題の数々を描いた短編小説だ。小説の最後に張が見た宋のひととなりが描かれる。一節を引用しよう。

「立派な人物になりたい」、宋はそんなことを考えたことはないだろう。物心が付いた頃にはすべての専門家、科学者やエンジニア、作家、教授たちはほぼすべて林彪と四人組によって「臭老九」（文化大革命期に使われた知識人の蔑称）扱いされていたのだから。格付けするなら、宋たちチンピラ以下の存在だ。うらやましがる道理もなく、頑張って目指すべき必要もない。資産階級の典型的な思想といえば「知識は力なり」だが、私たちの宋くんにはそんな考えはない。知識が何の役にたつ。ずっと「造反」し続けていればいいではないか。張鉄生（一九七三年の大学入試で、物理化学のテストをほぼ白紙で提出したにもかかわらず、官僚に書簡を送って認められ、獣医学部に合格。後に病院幹部に取り立てられた）は0点だったというのに出世したではないか。……このように見ていくと、宋に貼られた「脳みそは資産階級思想でいっぱい」というレッテルは取り止めなければならない。問題にあわせた対策が必要だ！　資産階級成長段階における思想や観点は宋の頭にはほと

んど、いやまったく入っていない。あるのは封建時代の「男たちの義気」だったり、資産階級没落段階における享楽主義といった反動思想の影響ばかりだ……宋に対する張先生の分析から目をそらさないでほしい。これは事実なのだ。残念なことに、もしあなたが祖国を愛するならば、愛すべき祖国を思うならば、宋の問題は極端な個別事例ではないことから目をそらしてはならない。

当時の中国において悪とされた資本主義思想がチンピラに落ちぶれた子どもを作ったのではなく、文化大革命の混乱によって子どもたちの心が破壊されたと主張する内容だ。「班主任」以外の傷痕文学も同じく、文化大革命がいかに人々の心を壊し、大きな傷跡を残したかを明らかにする内容である。

文化大革命直後、傷痕文学の時代から約四〇年の間に、中国における文化大革命イメージは大きく転換したわけだ。その理由はどこにあるのだろうか。中国共産党による言論統制が強化されたことによってかつての傷痕文学のような、文化大革命に対する根本的な批判が許されなくなった。これは十分に考えられる筋書きだ。しかし、出版許可を受けていないような同人誌であったり、あるいはインターネットの書き込みであったり、そのようなものまで一斉に内容が変わっていることをどう受け止めればいいのか。長年にわたって私を悩ます課題だった。

辣椒とその父親

この問いに答えらしきものをいただく機会を得た。それは友人である中国人漫画家・辣椒（ペンネーム。本名は王立銘）の父親との出会いだ。辣椒は中国の風刺漫画家だ。拙著『なぜ、習近平は激怒したのか――人気漫画家が亡命した理由』（祥伝社新書、二〇一五年）に詳しいが、辣椒は二〇〇〇年代後半に中国のネット論壇ブームに乗り、一躍オピニオンリーダーとして活躍した人物だ。政府を鋭く批判する風刺で人気を集めたが、習近平体制に入りオピニオンリーダーに対する取り締まりが強化されたことで発言が難しくなる。中国の大手SNS「ウェイボー」を主要な発信チャネルとしていたが、六〇回以上もアカウントを消去されたという。

二〇一四年には十数もの官制メディアが「漢奸」（売国奴）として、辣椒を批判する記事を掲載した。当時、日本滞在中だった彼は帰国すれば身に危険が及ぶと判断。中国には帰国しないとの決意を固める。その後三年間、日本で漫画家として活動した後、二〇一七年に米国に移住した。

その辣椒は新疆ウイグル自治区の出身だ。彼の著書『マンガで読む嘘つき中国共産党』（新潮社、二〇一七年）にもその経緯は一部描かれているが、辣椒の父、王宝輝は一九六六年、志願して新疆生産建設兵団に入隊した。母親の許偉は一九六四年、新疆生産建設兵団に下放された。許偉の母親は居民委員会主任だったため、率先して子どもを下放しなければならなかったのだ。四人の姉妹のうち本当は三番目の姉が下放されることになっていたが、出発直前になってボーイフレンドと家出してしまった。そこで代わりに末娘の許偉が新疆に行くことになったという。自分の知らない新しい生活が待っているという期待感もあって、気軽に新疆行きを決めた許偉だったが、現地に着くと厳しい生活環境に苦しめられたと振り返っている。一九六七年に二人は結婚。その六年後に辣椒が生まれている。

まだ幼かった辣椒は新疆での暮らしや文化大革命について多くを覚えていない。ただし、新疆では子育ては難しいと二歳から上海の祖父母に預けられ、両親と離ればなれになったこと、そして新疆戸籍だったため上海でさまざまな不都合に遭遇したことはよく覚えていると話す。戸籍がないため、「借読生」（学校所在地に戸籍がないが特別に入学を認められた生徒）として入学するなど多くの不便があった。今、中国には「留守児童」と呼ばれる子どもたちがいる。両親が都会に出稼ぎに出かけたため、農村に取り残された子どもたちを意味する。辣椒は四〇年前に今とは逆の留守児童、すなわち両親が遠く離れた農村で暮らし、自分が都市で暮らすという生活を余儀なくされていた。そうした個人的な体験もあり、文化大革命について極めて批判的だ。

この感情は父とは大きく異なっている。王の手記では文化大革命について、造反派同士の衝突について取り上げられているだけだ。つまり、十年間にわたる文化大革命の、初期の混乱を取り上げたのみ。奪権闘争と内紛が続いた造反派の時期が終わった後については特段の記述はなく、文化大革命という政治運動に対する評価も特にない。

一方で、大躍進運動に関しては厳しい見方を示している。一九四二年に河北省の農村で生まれた王は大躍進当時には村の食堂の管理員だったが、配給が減り飢餓に苦しむ中、農村を飛び出したという。「草原に行けば羊がいるはず。肉が食べられる」と、内モンゴルに向かおうとした思い出まであるという。ネズミ、スズメ、ハエ、蚊などを撲滅する四害駆除運動や、素人が鋼鉄を生産する「土法煉鋼」などを体験し、その愚か

さを知ったと書き残している。

大躍進と文化大革命に対する感情には大きな温度差がある。その理由を王本人にたずねた。文化大革命初期には紅二司と一三司という造反派の二大派閥による抗争による混乱があったが、革命委員会が成立し混乱が収まった後には生活に大きな影響はなかったという答えであった。文化大革命は発生から波及、収束において、その時期と地域によって大きな差異があったことは知られている。今も忘れることのできない境遇に置かれた者が多々いたことは間違いないが、差異の大きさゆえに集団的な経験として共有されづらいという側面があるのではないか。

知識青年サイトで発表される回顧録、あるいは元知識青年が出版した同人誌は個々人の記憶を記したものであるが、その目的は集団的体験と過去を共有することが目的である。独創的なエピソードを記すことが目的ではない。皆が同じ時間を過ごしたと確認することに重きが置かれる。人々が共有可能な最大公約数を抜き出していった結果、異郷の文化であったり、苦しい生活を生き抜いた知恵であったり、あるいは自らがなした改革といったトピックが選ばれていった。無数の人々が大量の回顧録を残しているにもかかわらず、その記述がきわめて似通っているのはこうした背景があるのではないか。

王の手記からはもう一つ、大きな示唆を受けた。それは文化大革命以上に、その後の歴史的展開に対して強い不満を表明しているという点だ。不満は大きく二点ある。戸籍の問題と、道徳の乱れだ。

まず前者について説明しよう。現在、中国には新疆生産建設兵団があるが、一九六六年前後に黒龍江生産建設兵団、内蒙古生産建設兵団、福建生産建設兵団、蘭州軍区生産建設兵団、雲南生産建設兵団などが相次ぎ設立され、知識青年たちの受け皿となった。文化大革命末期に兵団制は取り消され、一般の農場や牧場へと改組される。文化大革命終結後には元の戸籍地への帰還を求める声が高まり、請願やストライキ、ハンストなどの活動の末、ついに帰還が許可されることになる。いわゆる知識青年の「大返城」（都市への帰還）である。

ただし、新疆生産建設兵団だけは維持され、知識青年の帰還も原則許可されなかった。他の生産建設兵団は文化大革命に伴って設立されたものであるのに対し、新疆だけは一〇年以上も早い一九五四年に設立され、国防の要とされてきたという違いがあった。

王の手記によると、上海出身の知識青年たちは一九七八年から陳情、座り込み、ハンスト、北京への陳情などの抗議活動を展開。一

九八〇年になって汪鋒・新疆ウイグル自治区第一書記、新疆生産建設兵団第一書記はついに帰還を認めた。知識青年たちは続々と上海市に戻り始めたが、大量の青年の帰還に驚いた上海市政府が中央に報告。最終的に鄧小平が人民解放軍に命じて追い返した。その後、集団帰還の動きは途絶えるが、上海出身の知識青年たちはさまざまな手段を使って帰還を試みることになる。王は戸籍を新疆に残したまま、河北省へと戻った。その後、政策が代わり、妻の許偉は二〇〇〇年に、王は二〇〇八年に上海戸籍を取得している。彼らにとって下放が終わったのは二一世紀になってからということになる。

王たちと同様の戸籍問題を抱えたものは少なくない。上海市が代表的だが、その他の大都市も知識青年の一斉帰還による人口急増を恐れて戸籍回復を厳しく制限した。新疆生産建設兵団だけではなく、その他の地域でも同様で、下放先から戸籍転出許可が出ているにもかかわらず、原戸籍地が復帰を許さずにどこにも戸籍が所属しないという者が続出した。これを「口袋戸口」（ポケット戸籍）と呼ぶ。戸籍復帰許可の書類がポケットにありながらも、実際には復帰ができずに中ぶらりんになっている状態だ。

二〇一〇年に大手ポータルサイト「網易」に掲載された記事「上海伝奇4：上海知識青年、戻れない家」など、こうした大都市出身の知識青年たちの戸籍問題に関する記述は回顧録のみならず、新聞やウェブメディアの記事にも少なくない。文化大革命当時の思い出が最大公約数の記憶に塗り替えられていく一方で、その後長期にわたり続き、かつ経済的利益にも直結した戸籍問題は強烈に意識され続けている。

もう一つの不満が改革開放が始まって以後の混乱だ。新疆を離れた王夫妻は河北省秦皇島市で「個体戸」（自営業者）として生計を立てる。そこで直面したのは計画経済からの急転換で生まれた、むき出しの競争だった。長年にわたり民間の商売がない期間を経て、突然商業が復活したため、秩序がゼロの状態からスタートしたのだ。王は当時の状況を「無茶をやった人間が財をなした」と表現する。道徳を捨て、あこぎであればあるほど成功したのだという。王夫妻はさまざまな商売に手を出したが、その一つが衣料品販売だ。はるばる広東省まで出向き、衣料品を仕入れて市場に借りた店で販売していた。

生真面目な王夫妻は仕入れ値に一定の利益を乗せた金額で販売することしかしなかったが、ユニークな形をしたライターなど、ちょっと物珍しいものを仕入れては、仕入れ値の百倍といった暴利

を稼ぐ人が少なくなかったという。成熟した商業社会ならばそんな暴利で稼ぐことは難しいが、商業秩序がないところからのスタートだけにやったものがちの世界だったという。まさに「向銭看」（「向前看」（前を見る）のかけ言葉。金儲け第一主義の意）の時代だ。

「向銭看」の時代について行けなかった人々にとって、改革開放後の混乱、格差の拡大は強い不満を抱くものであった。その極致にあるのが文化大革命を含め、毛沢東統治時代の中国を取り戻すべきとの主張を持つ毛沢東左派だ。在米の民主化運動家の陳破空によると、毛沢東左派の大半は文化大革命時代に青春を過ごした高齢者だという。

毛沢東左派の存在が世に知れたのは薄熙来の影響が大きい。二〇〇七年から二〇一二年まで重慶市委書記の地位にあった薄熙来は「唱紅運動」（革命歌を歌う運動）や革命聖地巡礼などのイベントを主催し、毛沢東左派を中心とした格差社会に反感を抱く人々の支持を得ることによって出世をはかった。総書記就任後の習近平は薄熙来を支持した毛沢東左派に直接コミットしてはいないが、自らを毛沢東とかぶらせるようなイメージ戦略は薄熙来を踏襲し、毛沢東左派に共感するような層の人々を取り込もうとしていることが指摘されている。

毛沢東左派の人々の結節点となっていたのが「烏有之郷」（ユートピアの里）と呼ばれるウェブサイトだ。孔慶東北京大学教授や作家の司馬南などのイデオローグによる文章のほかに一般の投稿も掲載されていた。薄熙来の失脚に伴いサイトは閉鎖され、現在ではほとんどの投稿が消失しているが、「烏有之郷海外版」などいくつかの関連サイトに一部寄稿が残っている。

残っている投稿の一つが「私は一匹の野良犬」というものがある。以下はその冒頭部分だ。

私は一匹の野良犬だ
故郷の匂いを嗅ぎつけて戻ってきた
毛も抜け視力も衰え
まつげに異郷のほこりがこびりついている
故郷の人は変わっていた　もはや帰郷の道は見いだせぬ
街並みで浴びせられる、見知らぬ人の視線は雪よりもつめたい
尻尾をまるめてとぼとぼと歩く
目には涙が浮かんできた

投稿者がどのような人物かは記されていないが、若き日に故郷を離れて苦しい生活を送ってきた悲哀がつづられている。実際に文化大革命を経験した世代がその時代を懐かしみ、戻りたいとなぜ望む

のか。それはむしろ文化大革命後の苦しい生活のほうがより身近でリアルなものと感じられているからだろう。サイトに残された文章には他にも「中国人はなぜゴールドマン・サックスに怒らないのか」というものもある。この国際的な投資銀行は中国に投資し、人民の富を略奪してきたではないかという批判であり、改革開放以来の市場経済路線に対する批判が込められている。

毛沢東左派は二〇一二年の尖閣諸島国有化を発端とした対日抗議デモにおいて、盛んに活動したことで知られているが、その際には日本に対する抗議の横断幕以外に、毛沢東の肖像を掲げたことで注目された。また黄金大米反対というまったく無関係の横断幕も存在した。黄金大米とはゴールデンライスという遺伝子組み換えイネを意味する。デモの直前、二〇〇八年に米国の研究機関が湖南省農村部の児童に対し、現地政府及び保護者の同意を得ずにゴールデンライスを提供していたことが発覚していた。尖閣諸島とはまったく無関係な上に、毛沢東時代への回帰を目指す彼らの主張とも関連性は薄いように思えるが、市場経済や科学など改革開放後に押し寄せて生活を変えた一切の事物を、毛沢東左派は一連のものとして認識していた。

おわりに

本稿ではここまで文化大革命がどのように記憶されてきたか、回顧録や同人誌を頼りに考えてきた。文化大革命が多くの人々を苦しめたことは間違いないが、多くの人々に共有される集団的記憶としては、外部からの想定と現実との間には距離があることがわかった。少なくとも大躍進や改革開放など経済という形ですべての人々に大きな衝撃をもたらした歴史事象と比べると、個々人の経験の差がきわめて大きいことがうかがえる。

この文化大革命理解は毛沢東左派、そして彼らを利用した薄熙来、習近平のイメージ戦略をどう理解するかにもつながるのではないか。文化大革命の経験の風化と格差社会化の進展が懐古主義的な左派的情緒につながるとも指摘されてきたが、ここまで述べてきたような文化大革命理解の共通基盤が中国社会に存在しないこと、むしろ改革開放後の経済問題のほうが人々に共有体験をもたらしていることがその背景にあるのではないだろうか。